

趣旨説明：国境を越える歴史学

本ワークショップは、中世ヨーロッパの「国境」を通じて、近代歴史学の一国史観を乗り越え、21世紀にふさわしい新しい歴史学のあり方について議論するものである。したがって、スペインやドイツといった現在の国家の「国境」を扱うものではない。またその起源を扱うものでもない。現在スペインやドイツと呼ばれている地域において中世に成立していた今日とは異なる政治的枠組みの「国境」のあり方を歴史的に解明することが本ワークショップの課題である。

周知のごとく、中世のイベリア半島では、アラゴンやカスティーリャやナバラといった政治的枠組みが併存していた。同様に中世にドイツという国はなく、神聖ローマ帝国という政治的枠組みが成立していた。現在のスペインやドイツといった政治的枠組みは、法・制度などの文明(Civilisation)を中心に形成された「ステイト(State)」としての国と、「文化(Kultur)」を中心に形成された「ネイション(Nation)」としての国」という二つの異なる要素の結合体としての「ネイション・ステイト(Nation-state)」という視点で説明されることが多い。このような先行研究を踏まえたうえで、さらに一歩研究を進めることが本ワークショップの目指すところである。というのもこのような理念型では十分に捉えきれない「中心」に対する「辺境」の問題が存在すると考えたからである。

そこで本ワークショップでは、現在のスペインのなかのカタルーニャと呼ばれる地域の中世の「国境」について村上司樹氏に、現在のドイツ地域とかなりの領域が重なる神聖ローマ帝国の「国境」について服部良久氏に登壇していただき、最新の実証研究の成果をご教示いただくこととしたい。コメンテーターとして参加される多田哲氏に、ご専門のリエージュの具体的な事例を取り上げつつ、全体の議論を総括していただく。本ワークショップは、21世紀のフロンティアヒストリーを実践する試みである。